

八王子便り (4)

経堂聖書会に連なる皆様

新型コロナウイルス感染も少しずつ収まる気配をみせてきました。ホッとされている方もおられましょう。

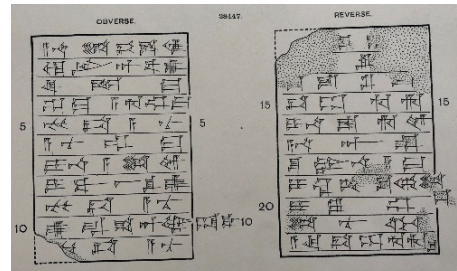
思えば、人類史は病気なかでも疫病との格闘の歴史でもありました。中世から近世にかけてヨーロッパで幾度となく起こったペストの大流行についてはよく知られていますが、そのはるか以前から、人々は疫病を記録に残してきました。

そこで、はじめに疫病に関する古代オリエントの文書を紹介し、次に旧約聖書にみる疫病の受けとめ方とその意味に触れてみることにいたします。「便り」ならざる「便り」です。
月本昭男

古代オリエントの文書に残る疫病

人類史上、疫病に関する最も古い記録文書のひとつは、前 1700 年頃に楔形文字で粘土板に記された、次のような短い書簡です (大英博物館所蔵 CT 29,1)。

- | | |
|--|--------------------|
| 1. a-na Li-pi-it-EŠDAR | リピト・イシュタル |
| 2. ù Lú- ^d Ba-ba ₆ | とル・ババに |
| 3. qí-bí-ma | 告げよ、 |
| 4. um-ma A-ḫu-um-ma | アフマが次のように (言ったと)。 |
| 5. mu-ta-a-nu | 疫病が |
| 6. a-nu-um-ma | いまや |
| 7. ina a-li-im | 町に |
| 8. ba-aš-šu-ú | 起こっている。 |
| 9. mu-ta-a-nu | 疫病は |
| 10. ú-la ša ^d GĪR.UNUG.GAL | 神ネルガルによるのではない。 |
| 11. mu-ta-a-nu | 疫病は |
| 12. [ša ^d AS]AR š[a x x] | [...] の [神ア]サルによる。 |
| 13. [na-gi]-ru-[um] | 伝令に |
| 14. [l]i-ša-si-m[a] | 呼びかけさせよ。 |
| 15. ta-ap-ḫu-ri | 集まりを、 |
| 16. i-na iš-ri-im | 村において |
| 17. a-na ^d ASAR | 神アサルのために |
| 18. šu-uk-na-a-ma | 催して、 |
| 19. i-la-a[m s]u-ul-li-ma | 神をなだめよ。 |
| 20. i-lu-um | 神が |
| 21. li-nu-úḫ | 鎮まるように、 |
| 22. a-di ta-ap-ḫu-ri-šu | 彼のために集まりがあるかぎり。 |



本書簡の手書きコピー (CT 29,1)

- 1-4 行は書簡の受信者と発信人。3 行目の「告げよ」は、書簡が読まれたことを示す。
5 行。「疫病」のアッカド語はムターヌ (mūtānu)、「死 (mūtu)」の派生語。疫病は「死にいたる病」と受け止められていたことがわかる。
10 行。ネルガル (^dGĪR.UNUG.GAL=Nergal) は冥界の災厄神。
12 行。アサル (^dASAR) はバビロニアの主神マルドゥクの別称。

この書簡によれば、疫病は災厄神ネルガルではなく、神アサル (=マルドゥク) の怒りによるものなので、君たちのいる村に疫病が及ばないように、村人たちを集めて、神

アサルをなだめる儀式を行うがよい、というのです。

すでに『若木』65号の「あとがき」に紹介しました『アトラム・ハシース』は、この書簡とほぼ同じ時期に書き残された神話です。そこには、太古の昔、人間の喧騒に怒った神エンリルが人類を滅ぼす疫病をくださすことを命じますが、「最高の賢者」は疫病をもたらす神を懐柔して、滅亡を逃れた、と物語られていました。

シリア・パレスチナの都市国家の領主たちとエジプトのファラオとの間で交わされた書簡にも疫病への言及がみられます。バイブル (Bible) の語源にもなったフェニキア海岸の都市国家ビブロス (Byblos) の領主リブ・アッドゥ (Rib-Addu) は、ツムル (Šumur) という町に疫病が蔓延したので、自分の町を封鎖した、とファラオに報告しました。それに対して、ファラオは、それは人間の疫病か、それとも驢馬の疫病か、と問い返しています (EA 96,6-15)。前14世紀中ごろのことです。

前一千年紀にはいりますと、シャルマナサル V 世 (王下 17:3 に言及) の後に即位し、前 722/21 年に北イスラエルを滅ぼしたアッシリア王、サルゴン II 世 (前 722-705 年) の治世第 15 年に、アッシリアに疫病が起こった、という記事が『バビロニア年代記』に伝わります。その年、サルゴン王がバビロニアや「海の国」への軍事遠征を控えたのは疫病蔓延のゆえであった、といわれます (右図はサルゴン II 世 (右) と高官の一人を描いた石の浮彫)。



楔形文字資料のなかではト占文書が最も頻繁に疫病の蔓延に触れますが、時代を特定できませんので、紹介は省かせていただきます。

旧約聖書における神の「処罰」としての疫病

今日のように近代医学や病理学が発達していなかった古代のこと、人々は、疫病をはじめとする多くの災厄を神々や悪鬼・悪霊の仕業と信じました。旧約聖書を残した人々も、疫病を神ヤハウエからくだされる「処罰」とみなしています。

旧約聖書のなかで、最初に疫病に言及するのは出エジプト記です。モーセとアロンは、イスラエルの民が「疫病と剣」に撃たれないように、荒野で自分たちの神に礼拝をささげさせてほしい、とファラオに要求しました (出 5:3)。また、民を去らせまいとするファラオにくだされた十の災厄のひとつが疫病でした (出 9:3)。

神からの「処罰」である疫病は、神に背くイスラエルの民にもくだされます (レビ 26:25、申 28:21 ほか)。物語では、人口調査をしたダビデに、三年間の飢饉、三ヶ月間の敵の攻撃、三日間の疫病という三種の処罰が提示されました (サム下 24:13 以下)。ダビデが選んだのは、言うまでもなく、三日間の疫病でした。

じつは、この三種の災い (飢饉、敵の攻撃、疫病) は、神ヤハウエによる「処罰」の三点セットでした。敵の攻撃は短く「剣」と言い換えられ、「剣と飢饉と疫病」の到来を告げて、繰り返し、背く民に警告したのがエレミヤとエゼキエルでした (エレ 14:12、21:7 ほか、エゼ 6:11、12、14:21 ほか)。

それにしても、災いを神からの処罰として受けとめるなどとは、いかにも古代人の発想です。科学的知識の貧しい時代の思いつきにしかみえません。ならば、そこから私たちが学ぶべきものはなにもないのでしょうか。

疫病を厄病神の仕業に帰したり、神の怒りの結果とみなした古代メソポタミアの人々

は、上にみましたように、宗教儀礼によって神を慰撫して、疫病から逃れようとした。近代化以前の日本において、人々が「祟り」をくだす神や怨霊を祀り、その怒りをなだめようとしたのと同じ発想です。

旧約聖書は、それに対して、疫病などの災いを神からの「処罰」と理解しました。処罰と祟りは微妙に異なります。人間の能力では対処できない災厄が神からの処罰であれば、人々はこれまでの自分たちのあり方がよかったのか、と反省を迫られ、罪の自覚へと促されます。神の怒りをなだめようとしても、はじまりません。自らの罪を悔い改め、神に立ち帰るほかにすべはなくなります。預言者たちが「剣と飢饉と疫病」をもって民に警告した意味がここにありました。神の怒りを「なだめる」という思想は聖書的ではありません。

ところが、ここには大きな課題が残されていました。戦争（「剣」）にしても、飢饉にしても、疫病にしても、それらが起これば、犠牲になるのは、富める者よりも貧しい者たち、健常人よりも障がいを抱えた人たち、強者よりも弱者のほうではありませんか。神による処罰に、そうした不条理があつてよいものか、といった疑問がここに生じましよう。預言者たちはその辺をどう考えたのか、と問わずにはおれません。この種の問いに、聖書はどのように答えてくれるのでしょうか。

この点は、いずれ機会を得て、ご一緒に考えさせていただきます。

以上、今回は、随分と堅苦しい「便り」となつてしまいましたが、最後は、ご紹介です。

当方、古希を過ぎたためでしょうか、最近、著作集などに推薦の言葉を頼まれることが多くなりました。無教会関連では、すでに第1巻が刊行された『富田和久講演集』全四巻（二紀出版）とこれから刊行される『韓国無教会双書』全九巻（キリスト教図書出版社）です（PDF添付）。

富田和久先生は京都大学理学部の学部長をつとめた高名な物理学者であり、若き日に矢内原忠雄から信仰を学び、京都大学聖書研究会さらに北白川集會を主催された方。この集會は、先生亡きあとも継続され、現在、丹野きみ子さんが出席されています。第一巻『学問の世界《悦び》』は、京都大学の新生に語られた講演を中心に編まれており、今の大学生にも読んでほしい、と思わずにはいられない内容です。

1920年代に内村鑑三の講筵に連なった若き留学生、金教臣（キム・キョウシン）と宋斗用（ソン・ドヨン）は、その後、咸錫憲（ハム・ソクホン）たちと共に、植民地時代の祖国で『聖書朝鮮』を創刊し、聖書に基づく福音信仰を掲げて、それぞれの生涯を貫きました。双書はこの二人が残した文章からなり、日本側の監修と翻訳責任は森山浩二氏が負っていただきました。

もう一冊、大学時代の聖書研究会の先輩であり、国立聖書研究会の加納貞彦氏が『創世記に学ぶ（上）—21世紀の共生』と題する著作を早稲田大学出版部から上梓されました。その「帯」に推薦のことは添えさせていただきます。



성서조선 창간 동인들이 1927년 2월에 한자리에 모인 사진. 뒷줄 왼쪽부터 시계방향으로 양관성, 함석헌, 송두용, 김교신, 정상훈, 류석동, 아래 왼쪽은 성서조선.

内村鑑三の講筵に連なった「杉並村」の朝鮮の若き留学生たち。後列向かって右が咸錫憲、前列右端が宋斗用、右から二番目が金教臣。

(2020.5.20 記)